

会報ふれあい

No.69

令和5年7月1日

発行・編集 青少年育成牛久市民会議

事務局 生涯学習課 TEL.873-2111



シャトー本館を背景にひとときわ映える鯉のぼり

3つの「初めて」が重なった第34回うしく、鯉まつりは、5月3日、五月晴れの空、緑輝く木立の下で開催され、来場者数はこれまでの最高と言われる大盛況の賑わいを見せました。鯉まつりの新しい楽しみ方・生かし方が見えてきた一方で、今後の課題も浮上りましたが、大方の評価は「鯉まつりの復活劇は成功した」というものでした。

4年ぶり・会場は牛久シャトー・日本遺産フェスタと共催 3つの「初めて」で生まれ変わった第34回うしく・鯉まつり

メイン会場はBBQガーデン
木の隠れにシャトー本館

鯉まつりはバーベキューガーデンをメイン会場として展開されました。東側にステージ、北側に本部と夢の広場、南側に希望の広場と創造の広場、西側には牛久シャトーの飲食ブースが開店しました。来場者は北側に設けられた入り口で検温・消毒を行いました。

開会セレモニーはステージで行われました。背景には葉桜の緑の枝越しに望めるレンガ色のシャトー本館。この場所の設定に感心する声がまず聞こえました。観客席がステージに近いことも好評でした。

主催者・来賓の挨拶に続く子どもたちへのプレゼント。今年はこちらは野牛久幼稚園児に贈られました。子どもたちのメッセージは中根小学校区子供会から。クラッカー鳴らしは栄町・下根・つつじが丘の3保育園が担当しました。

一中が合唱、三中が和太鼓
おくのガマガルも舞台上で

ステージ発表の皮切りは牛久一中合唱団。「タッチ」「前を向いて」「夏の終わり」「百万本のバラ」「旅



1年生もバチを叩いて本番デビュー



ステージ発表の皮切りを務めた一中合唱団

立ちの日に」の5曲を披露してくれました。指揮の皆川先生は「屋内でも屋外でも歌の作り方は同じです」と言っておられました。マイクを通しているため屋内会場とは違った迫力を感じた人もいたようでした。「一中の合唱団は今

や牛久市の財産だ」という人もいました。

牛久三中和太鼓部は20曲あるレパートリーの中から「息吹」「やぐら」「櫻」「宴」「風神」というそれぞれに曲調の違う5曲を演奏しました。和太鼓部の部員は3年生2人、2年生4人、1年生9人。ほとんどの部分を3年と2年の部員が演奏しました。入部してまだ間もない1年生は今回の「宴」でバチを叩いたのが本番デビューでした。本格的なデビューは校区内の各地域で夏祭りが行われるころ



健やかさも注目されたおくのガマガール

辞める人が多いので、平成24年の結成以来メンバーはずいぶん入れ替わりました。現在は小学校5年生から高校1年生までの5人。牛久町や小坂団地の子どもも入っています。県南一帯はもとより国立劇場やNHKテレビなどにも出演しています。

休憩の暇なかった当てる担当
キャタピラーレースは高速化

3つの広場とステージに囲まれた広い芝生では、的当て大会とキ

になります。かつ祭りに3年生の集大成が見られるそうです。

おくのガマガールもステージでがまの油売りの口上を演じました。リーダーの綾部龍昭さんは「コロナ禍で出演機会が少なかったけれど、子どもたちは自分たちで、ああやった方がいい、こうやった方がいいと、いつも工夫している。だから今回もうまく演じてくれた」と満足げでした。おくのガマガールのメンバーは中学を卒業すると



芝生で走りやすくなったキャタピラーレース

このゲームは「幼稚園生から中学生まで参加OK」でした。投げ位置から的までの距離が以前に比べると短くなったので的中率は上がりました。

ヤタピラーレースが行われました。的当て大会では10時開始と同時に長蛇の列が出来、その列は結局まつりの終了まで途絶えることはありませんでした。係の人は昼食の時以外は全く休憩することが出来なかつたそうです。



距離が短くなった的中率は上がったが...

これまでこのレースは、コンクリートの地面に直に段ボール製のキャタピラーを置いてやっていました。今回は芝生の上でのレースになり、膝や手に痛みなどの違和感を感じることが全く無くなったためではないかと見る人もいました。

エア魚釣り、池をもっと広く
テーブルカーリング、親が夢中

各広場のテントも子どもたちとその親で常についていました。エア魚釣りは、係の人が「来年は池をもっと広げたい」というほど子どもたちが集まりました。しかし以前の魚のつかみ取りに比べると、就学前の幼児が多いように

上がりましたが、高学年生は、思いつき投げののをセーブしなければならぬ気持ちになることに不満な子どももいたようでした。

反対に、的の直前まで近づかなければ、玉が届かないような幼い子どもの参加も目立ちました。こういう子どもは親も付き添っていても、玉がよつと的に届いて親子共々満足そうに帰って行く姿に観客も目を細めていました。

キャタピラーレースでは子どもたちの動きが活発で、「メチャ楽しい」という声が多く聞かれました。子どもたちは手足の交互の動きが非常に早く、キャタピラーの進むスピードがこれまでの鯉まつりよりずいぶん速まっているように見えました。

竹ポックリも大人気でしたが、当初予定していたレースはやりませんでした。高学年生の参加を多く見込んで少し高め竹ポックリを沢山用意したけれど、小さな子どもが多かったため、それで走って怪我をさせてはいけないと考えたからです。係の人たちは、来年は竹ポックリの高さをもっと低くしてレースを実現しようと考えています。

テーブルカーリングは2人でチームを組んで遊ぶゲームですが、親子で組み、親の方が夢中になっ

これまでものレースは、コンクリートの地面に直に段ボール製のキャタピラーを置いてやっていました。今回は芝生の上でのレースになり、膝や手に痛みなどの違和感を感じることが全く無くなったためではないかと見る人もいました。

見えました。池の中を泳ぐ魚をつかみ取りする躍動感と、磁石で紙の魚を釣るゲームの静かなおとなしさは、同じ魚取りでも全く違う遊びであることが明瞭でした。

バルーンアートは、親や係の人に教わりながら自分で作る子どもも出ていたのをもっといく子どもも――どちらも相変わらずの人気でした。



もっと広い池が欲しかったエア魚釣り



子どもも大人も熱中したテーブルカーリング

ている光景も少なからず見られました。一番楽しかった遊びにテーブルカーリングを挙げる子どもがかなりいました。

けん玉、メンコ、ペーゴマ、あやとりなどの昔の遊びも低学年から高学年まで人気があります。教えることの出来る人がどんどん減っているのが問題ですが、鯉まつりでは土浦から数人助っ人として来てもらっています。

子どもも大人もそれぞれに自分たちの楽しみを追求

ボーイスカウト、ガールスカウト、牛久市少年少女発明クラブが担当したワークショップは、会場がラ・テラス・ドゥ・オエノンとその庭園だったので、メイン会場とはかなり趣の違う展開になりました。

割り箸鉄砲作りや射的、的当て、丸太切りなどは庭園の、木立の下の小さな空間や散策路の脇などで



意外と力が要る丸太切りにお父さんの助力は必須

行われました。全体として自然に包まれている感じが強く、ちょっとしたキャンブの雰囲気でした。その一方で、メイン会場の脇を

通ってオエノンの庭に入るあたりの小さな広場には幾つかのテーブルと椅子があつて、ここでは子どもたちとは関係なしに、高齢の人たちが静かに語り合っていました。子どもも大人も自由に自分たちの楽しみを追求している。会場が牛久シャトーだから生まれた鯉まつりの新しい光景です。

お目当てはパトカー 親や若者も興味津々

消防と警察のコーナーも、メイン会場からかなり離れた見えない場所だったのに、とても人気がありました。消防コーナーでは、会場が狭かったのではしご車を伸ばすパフォーマンズはありませんでした。しかし、子どもたちは防火衣を着せてもらって、十分満足そうでした。

警察のコーナーに来る人たちの



防火衣装着体験が人気だった消防コーナー

お目当てはパトカーと白バイ。パトカーでは警察官が1組1組運転席や助手席に乗せて、赤色灯を点けるボタン、サイレンを鳴らす装置、無線機、マイクの使い方などを説明していました。

これには子どもだけでなく、親や若者グループも興味津々で、順番待ちの長い列が途切れることはありませんでした。説明を聞いた後、親子だけでなく、若い男女のグループなども、次々に警察のマスケットであるヒバリ君と一緒にカメラに収まっていました。



警察マスコットのヒバリ君と記念撮影するバイト仲間の6人

日本遺産フェスタで生まれた鯉まつりの新しい要素 高木の枝が覆うサンクンガーデンで大人の祭り

シャトー本館と神谷傳兵衛記念館に挟まれたサンクンガーデンをメイン会場として開かれた日本遺産フェスタも、非常に大きな盛り上がりを見せました。その最大の要因が鯉まつりと共催したことにあるのは明らかでした。

シャトーのスーパーニアショップが店の脇に出したビール・ワイン売り場の店員に「鯉まつりと共催ではなかった前回の日本遺産フェスタと比べて、今日の売れ行きはどうですか」と聞くと、即座に「今日の方が圧倒的にいいです。人の出が全く違いますから……」という答えが返ってきました。

甲州市の店でも同じ質問をする

と、同じような答えが返ってきました。その店では、ワインや焼いたフルーツを、売ったり試飲させたりしていました。

ランクは午後1時半には完全に売り切れ。「これからまた材料を仕入れてきます」とのことでした。バーベキューガーデン入り口の脇に出店した2台のキッチン



混んでいてもゆったり時間が流れていたサンクンガーデン



シャトー正門脇の緑の散策路を彩った鯉のぼり

んな飲んだり食べたり、話し込んだりして、それぞれに自分たちの時間を過ごしているように見えました。

カーも、午後2時ごろには全てのメニューに完売の札を貼っていました。

店への行列100人近くも人が多くても時間はゆったり

サンクンガーデンに出された店には、どこも20〜30人ぐらいの列が出来ていました。一番長い列は本館に近い位置から始まり、神谷傳兵衛記念館の入り口辺りでL字型に曲がっていて、数えてみると100人近く並んでいました。

「こういう感じ、とてもいいですね」と言っていました。

サンクンガーデンで展開した、混み合っているけれどどこことなくゆったりしているように見えた光景は、鯉まつりが子どもたちだけのお祭りではなく、大人のためのお祭りでもある部分が付け加わった。その変化をはっきり物語っていました。

日本遺産都市への関心も喚起 研修会の目的地にする動きも

日本遺産フェスタの出し物は大人向けだけだったわけではありません。レストランキャノンの前の芝生では、1回100円のミニSLの乗車会が開かれ、乗車を待つ親子が常に列をなしていました。



1家族ずつ乗るミニSLの乗車会



ポニーも子どもも同じくらい可愛いかった

鯉まつりメイン会場の入り口の前では、乗馬クラブクレイン龍ヶ崎のポニーが、これも列をなして待っている親子連れの幼児たちに、額を触らせていました。恐る恐る手を伸ばす幼児たちを決して嫌がらずに受け入れるポニーの辛抱強さが印象的でした。

日本遺産フェスタでは本館2階で先着50人限定の講演会も開催され、甲州市、水戸市、笠間市の職

員がそれぞれの地域の日本遺産について講演しました。鯉まつりでそういう地域への親近感が喚起され、岡田小学校区地区社会福祉協議会は、この秋、甲州市へバス日帰り研修会に出かけることを決定しました。

近隣公園にもかなりの人出 鯉のぼりがあれば…の声も

鯉まつりの会場が牛久シャトーに移って使われなくなった近隣公園にも、200〜300人ぐらいの人が集まっていました。南側の木立と芝生の坂には、テントを張ってくつろいでいる家族も幾つかありました。北側の石段にも、ずらりと横並びに座った列が出来ていました。真ん中のコンクリートの広場では、小さな子どもたちが、ただワーワー、キャーキャー言いながら走り回っていました。

サンクンガーデンでワインを試飲し、席がないのでこの広場にきて芝生に座っていた、80歳代だという2人のご婦人は「子どもたちが走り回るのを見ていただけでも面白い。子どもも何もなくても遊べるのね」と感心していました。そして「ここにいつものように鯉のぼりがはためいていたら、もつと良かったのね。あの鯉のぼりは、下でお祭りが行われていなくても価値があるわ」とも言っていました。近隣公園の周りに集まった露天商の店もかなり人だかりが



祭りのない近隣公園にもこんなに人が…

編集後記

今回の鯉まつりでは、子どもが遊んでいる夢の広場に、大人がビールやワインのコップ片手に入ってきて来るという想定外の出来事がありました。日本のワイン誕生の地シャトーで行われる「大人も楽しむ」要素を強めた鯉まつりで、祭りの命である非日常の開放感をどう楽しむか。鯉まつりは、日常のエチケツト感覚と非日常の開放感を共に生かす、さらに深い智慧が求められていると思います。